

2013年度 前期	リフレクションペーパー
-----------	-------------

学科名	建築・デザイン学科							
科目名	住まいの計画							
科目区分	専門科目	単位数	2単位	開講時期	2年次前期			
必修・選択の別	選択必修科目(建築工学コース)／選択必修科目(建築コース)／選択科目(デザインコース)							
担当者	益田 信也							
授業の到達目標(シラバスから)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な住宅タイプを学んで、住まいのあり方は多様であることを理解できる(A6、B4)</li> <li>・住宅タイプそれぞれの成立背景を知ること、広い視野で住まいを観る力を得る(A6、B4)</li> <li>・同時に、今後の住まいのあるべき姿を考え、構想する力と問題意識を身につける(A6、B4)</li> </ul>							
日程と内容	<p>4/12 導入講義：授業の進め方と概要の説明、成績評価の方法／住まいの変化の要因</p> <p>4/19 農村住宅：住まいと集落景観、屋敷の構成と機能、住宅と生産活動、住宅の社会性</p> <p>4/26 町家：高密度居住のしくみ、生業と家族生活、町なみの形成と変容、町なみの保存</p> <p>5/3 長屋・アパート：密集する下町の住まい、住まいの開放性、同居と近居、定住と流動</p> <p>5/10 中廊下型住宅：伝統的な住様式、家族本位の近代化と封建制、住宅改良運動</p> <p>5/17 作家住宅：建築家と住宅設計、新しい生活像の提案、作品例の分析・考察</p> <p>5/24 都市型住宅：商品化住宅、伝統とモダンリビング、公私室型住宅とLDK構成</p> <p>5/31 地方の住まい：地方の戸建住宅、都市型住宅との比較、続き間座敷の機能と意味</p> <p>6/7 漁村住宅：高密度居住と路地空間、間取りの継承と変容、ムラづくりのシステム</p> <p>6/14 集合住宅(1)：集合住宅の系譜、住戸の近代化と定型化、多様化・変化への対応</p> <p>6/21 集合住宅(2)：定型化した団地の風景と設計基準、高密化と住戸の閉鎖化</p> <p>7/5 コーポラティブ住宅：居住者参加の集合住宅、住まいの管理</p> <p>7/12 これからの都市居住(1)：多様な家族像と居住サービス、高齢者住宅</p> <p>7/12 これからの都市居住(2)：協同居住、まちづくり</p> <p>7/19 これまでの授業の総括、定期試験に向けた総合演習と解説</p> <p>7/26 定期試験</p>							
成績評価基準	定期試験	60%	実技	0%	臨時試験	0%	部外評価	0%
	報告書・レポート	10%	プレゼンテーション	0%	課題	0%		
	演習	30%	計	100%				
授業到達目標の達成度	今年度は定期試験の受験生の72%が合格となり、一昨年の54%より大幅に向上したが、それでもまだ合格率は低い。合格者の平均点は72点で、昨年の69点よりは上がっている。概ね目標は達成できたと考えている。ただし、定期試験の成績が演習の得点と比べて低いことは、授業内容の理解度が低いと判断できる。							
反省点	1限目に関講される時間割であったが、一昨年のように履修を放棄する学生はあまりいなかった。不合格に至った学生のほとんどは、定期試験を受験しないか、受験しても得点が著しく低いものである。							
来年度の計画	演習科目「建築設計Ⅰ」(住宅の設計)との連動を考慮して授業計画を見直し、一部教科書の章立ての順序を入れ替えたことは、好奇心を高めてモチベーションを維持することに効果があった。また、講義回数定期試験を除いて15回と1回増えたことも、特に終盤余裕のある授業計画につながられた。							
授業評価アンケートに対するコメント	総合評価は8.0点(昨年度7.5点)とかなり向上したが、いずれの項目も全科目平均値を下回る。教科書の1章の内容が授業時間内で理解させるには多すぎることから、内容の削減を図ったことが良かったかもしれない。学部の施策による開講科目の制限で、この科目は昨年度は非開講の措置をとったため、本来2年生で受講すべきところが、3年生で開講せざるを得なかったことは、たいへん残念でかつ恐縮に感じている。							
履修登録者数	153名	定期試験受験者数	136名	合格者数	98名	合格率	72%	